全農

非遺伝子組み換えトウモロコシ

えさ用に分別輸入

生協などの要望に対応

JA全農は二十三日、遺伝子を組み換えていない飼料トウモロコシを一九九七年産から分別輸入する方針を明らかにした。米国イリノイ州の契約農家に生産を委託、非遺伝子組み換えの種子によるトウモロコシである証明書を発行する。輸送も、船内に仕切りを設け、他の作物と混ざらないようにする。生協などの要望を受けた対応で、このトウモロコシを飼料にした畜産物を区別化して供給する生産者にこたえる。

全農は、九一年から収穫後に農薬散布しない（ポスト・ハーベスト・フリー）飼料トウモロコシを輸入してきた。だが、生協などから非遺伝子組み換え作物による食品を求める声が高くなってきた。そこで、ポスト・ハーベスト・フリー契約をしているイリノイ州の十数戸の農家に、非遺伝子組み換えのトウモロコシ種子で栽培を委託する。九七年産から約七万～八万㌧を輸入する予定。

通常の種子を使っている証明書を発行、サイロも分別保管、他のトウモロコシと混ざらないよう船積みする。そのため、証明書の発行料一㌧当たり二百五十円と、分別物流経費として一㌧当たり二千五百円を飼料価格に上乗せする。

「遺伝子組み換え作物の善悪の問題ではなく、消費者の要望にこたえる」（JA全農）考えで取り組む。種子の段階だけでなく、検査体制の強化なども今後検討していく。要望しだいで増産もする。

全農がこうした方針を打ち出した背景には、生協など消費者の要望がある。非遺伝子組み換えトウモロコシの輸入も、生協が集まってロットをまとめ、生協の共同購入という形で輸入に踏み切る。

（1997年7月24日付、日本農業新聞）